かけがえのない一人一人のいのち

行き場のない人たちの最期に寄り添う

最期に看取ってくれる人が、肉親であるとは限りません。ドヤ街のホスピス「きぼうのいえ」では、病気や失職、家族離散など、さまざまな理由によってここにたどりついた人たちが、最後の日々を自分らしく過ごし、スタッフに看取られて人生を卒業していくのです。

山本雅基さん

「死にたくない」と言った人はいなかった

かつては日雇い労働者たちが路上にあふれ、〝山谷地区〟と呼ばれていたドヤ街の一角に「きぼうのいえ」は建っている。行き場をなくした人のための終のすみかを作りたいと、施設長の山本雅基さんが、看護師の妻美恵さんと共に七年前に設立した。

「ここは、わかりやすく言うと、ホスピスケアの受けられる独居用アパート。ドヤの住人だった人や路上で倒れていた人もいます。歩んできた人生ももっている病気もじつにさまざま。七三一部隊だった人もやくざだった人もいましたよ」

現在は「きぼうのいえ」本館に二一人、自立度の高い人が暮らす別館「なかよしハウス」に一一人が入居中だ。いつも満室で、地域性もあって男性が多い。

「入居するまで大変な思いをしてきた方たちだけに、ほとんどが『この人生より死んだほうがましだ』と思っています。ここへ来て、スタッフたちの愛のシャワーを浴びて、人間というのもまんざらではないと思い始め、自分らしさも取り戻していくのです。ここでの死の迎え方は二通りあって、一つは、『どこまでも生きるぞ』という希望をもったまま、肉体を脱ぎ捨てる人、もう一つは、『いつ死んでもいい』と穏やかに死を受容して人生を卒業していく人。共通するのは『死にたくない』と言って死んでいく人はいないということですね」

これまでに見送った人は九〇人。不思議なことに、孤独を愛する人は、人払いをしてひっそりと亡くなるし、賑やかなことが好きな人は、みんなが集まってくるのを待って「じゃ、さよなら」と亡くなるという。

やまもと・まさき●昭和38年生まれ。東京の山谷地区にあるホスピス「きぼうのいえ」施設長。同60年、日航機墜落事故のニュースに接したことをきっかけに聖職者を志し、平成7年に上智大学神学部を卒業後、「NPO法人ファミリーハウス」の事務局長を務める。同13年、ホームレスのためにホスピスを建てたいと活動を始め、14年、緊急一時保護施設「なかよしハウス」、在宅ホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」を開設。
ホームページhttp://www.kibounoie.info/

その人らしいナチュラルな死に方が、山本さんたちの一番望むところ。体全体がなだらかに死に向かうとき、その流れに反しないかたちでのサポートを目指す。インドのマザー・テレサの「死を待つ人の家」の日本版ともいえよう。

地域全体で看取る時代へ

「他人を看取るなんてよくできますね」

山本さんは、人からよくそう言われる。だ

が、他人を看取る難しさは感じたことがないという。

「家族を看取るのと同じことです。むしろ、家族であるがゆえの『死なないで！』という気持ちから解放されて、穏やかな看取りができるかもしれません。魂がふるさとへ還っていくことへの祝福と、一生懸命生きたことに対する称賛をもって見送ることができますから」

スタッフたちは、死を迎える人の手を握ったり足をさすったりしながら「私たち、あなたに会えてよかった！」「いろんな思い出をくれてありがとう」「逝きたくなったら力を抜いていいんだよ」などと声を掛け、そのときを共に迎える。

「他人とはいえ、一つ屋根の下で縁あって暮らした〝大家族〟のかけがえのない一人。そもそも、ここにくる人たちを『この境遇を生きていたかもしれないもう一人の私』という思いで迎え入れましたから、けっして他人ではないですね。かかわり合うべくしてかかわり合ったということです。おそらく、入所者の人たちも他人に看取られている感覚はないのではないでしょうか。人生の第四コーナーを回って、新しい家族に迎えられたと感じているでしょう」

コミュニティ全体で、その人の一生をいつくしみ「さよなら、またね」とごく自然に送り出すことができれば。この願いを地元に根付かせ結実させるため、山本さんたちは、第二、第三のきぼうのいえを建てたいと夢見ている。

（文・佐竹茉莉子）

「きぼうのいえ」の屋上には礼拝堂が建っている。山本さんは、「出会えてよかった」「がんばったね」という思いで故人を見送る

子どもたちに“いのち”をどう伝えるか

NPO法人「からだとこころの発見塾」理事長・鈴木誠二さん

小学校でいのちの授業を行なっている鈴木さん。学校や教育委員会から出前授業の依頼が数多くあるという

「からだとこころの発見塾」は、医療をよくしたいと願う医師、ジャーナリスト、患者、患者支援者、学生などさまざまなメンバーで4年前に立ち上げました。いのちの本質について教えることが難しい教育現場と手を結び、先生方をサポートするかたちで、専門的な講師による「いのちの授業」を、おもに中学校で展開中です。健康なときに、いのちの大切さに気づいてほしい。それが塾の願いです。現代っ子は生老病死（しょうろうびょうし）から遠いバーチャルな世界に生きているといわれますが、少なくともアンケートからは、身近な人やペットの死を悲しむ感受性がひしひしと伝わってきます。ツッパっている子も基本は何ら変わりません。

授業のテーマは、学校の希望や講師によってさまざまですが、私の授業ではたいてい「人は生まれた瞬間から死に向かって歩き始める。どこで終わるかわからない。たった一回の人生をあなたはどう生きたいですか？」というスライドで始めます。こうした問いかけを子どもたちは誰からもされたことがなく、考えたこともないでしょうから。

授業を通して、私たちが伝えたいのは、「奇跡のような確率で生まれたあなたのいのちはとても貴重」ということに加えて、「たった一回の人生なんだから一生懸命生きようよ」「死ぬ気になったら何でもできるよ」「人間の能力に差なんてない。本当にしたいことを見つけたらやり続けよう」ということ。これからも“いのちを削って”伝え続けます。

からだとこころの発見塾ホームページhttp://hakkenjuku.org/